

ひさとその女友達

廣津和郎

一
フィロ

隣室の子供の泣声にひさは眼をさました。

毎夜の手紙に二文か三文は何かに励みつけたりやう

に急にけなたましく泣き出すのである。四才

かといふのに榮養の足りなさをためか登背が悪

く、眼が赤くたむしりて頭にクサの出来た改ん

ど笑つた事のない女の子、ひさかその母親

に對するお愛想かう「抱つてよ」といふつこ

手をとらしきしこし側にお寄りこ来る事はなかつ

た。

ひさは一寸舌打ちした。併し舌打ちしたの

は、その女の子の泣声のためではない。握り

腕が自分の胸の上に重苦しくのしかかつてな

る事な気がおつたからである。彼女はその聲に

その腕を拂ひつけ、腹筋のこわさつて枕許の煙

草を引きたききつて一服をた。五月の夜は山

中央公論文藝特集 自稿

本文、9木2段 28字詰 22行